

ドライバーに寄り添い、ともに安全な車社会の実現へ



入社理由 「NASVAにしか」できないことがある。(独立行政法人として)

私は学生時代においては、民間への就職(金融系)を目指して就職活動をしていました。しかしながら、民間一本で就職活動をしていただけではなく、公務員試験への挑戦も視野に入れながら、広い範囲で「人生の選択」を模索していました。その最中、興味を引いたのが独立行政法人という独特な組織形態でした。民間企業でもなく行政でもない組織、そこには「利益の追求」ではなく「人の役に立つことの追求」を主とする業務がありました。その業務は「国民生活・社会経済の安定等の公共上の見地から確実に実施されることが必要な事務・事業ではあるが、国が自ら主体となって直接に実施する必要のないもののうち、民間の主体に委ねた場合には必ずしも実施されないおそれがあるもの」というまさに、社会において独立行政法人でしか出来ないものがあります。その中でも、自分自身が自動車事故の損害サービス部門に興味があったこと、オンリーワンの仕事をしたいという意向もあり、安全・安心・快適な車社会への貢献を目指す自動車事故対策機構に白羽の矢を立て、志望しました。

業務の役割 一人一人の色にあわせた「カウンセリング」

私は現在、大阪主管支所において適性診断業務に従事しています。適性診断とは、一言でいうと「個性」を見分けるもの。実は、「十人十色」という言葉にもあるように、自動車の運転にもその人独自の色(個性)があります。そして、その個性の中には安全運転を促す「よいもの」と、事故惹起につながるかもしれない「わるいもの」があります。それを前提に、業務内容を記述すると以下ようになります。

① 前述の両者を見分けるために「PCを使用した診断」を実施

② ①で見分けた色(個性)を材料に、フェイストゥフェイスで事故防止・再発防止に向けて一緒に考える場の提供である「カウンセリング」を実施

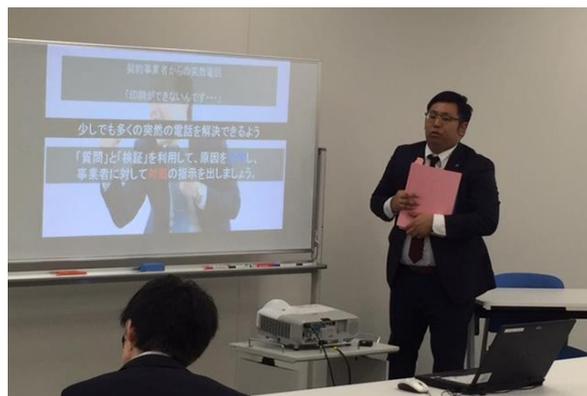
これが適性診断担当のメイン業務です。その業務の中で、日々、さまざまな運転者の方に出会い、安全運転への方策を運転者と一緒になって考えていくことができるため、ダイレクトに運転者の変容が感じられることが醍醐味です。

将来の目標 組織の根幹をなす職員になるために～日々これ挑戦～

私は、40代後半までは業務の「スペシャリスト」として、さまざまな業務において研鑽を積み、業務の本質やノウハウを獲得するべきであると考え、50代前半からは「ジェネラリスト」として、広い視点から組織の運営に関わる部分に携わってきたいというキャリアパスを考えています。NASVAは、キャリアパスを立てる上でも見通しがつきやすいため、非常に将来の自分をイメージしやすい環境であるといえます。

そこで、今後挑戦していきたい業務は、「被害者援護業務」です。今までは、事故防止等の「防ぐ」という業務をメインに担当してきましたが、交通事故被害者への支援「支える」という業務を通して、被害者の方に寄り添いながら、様々な形で支援をしていきたいという強い気持ちがあります。

被害者の方からの声を集めて、形にしていく。時には、既存の枠を超えて新しい形を提供していく。それが使命であり、やりがいを感じる部分であると考えています。



学生へのメッセージ 自分の「可能性」と「夢」を見つめて

今まさに人生の大きな岐路に立ち、悩み、考え、毎日を必死に駆け抜けていることと思います。人生においてこれほどまでに自分自身と向き合い、考え抜く機会はその多くはないと思います。だからこそ妥協せず、「その先に何をみるのか」、「どうしたいのか」を時間が許す限り悩み抜いて下さい。そして就職活動の中で、自動車事故対策機構の「NASVAでしか出来ない仕事を担う」ということに魅力を感じた方は、ぜひチャレンジしてみてください。



関口 貴紀 セキグチ タカノリ 大阪主管支所スタッフ

平成25年4月入社
法学部法律学科卒